

## 事情

大島 行雲

私は或る高原を訪れた。定職にはつけぬものの、何とか不定期に仕事にありついて貯めた雀の涙ほどの金を胸に、叔父の家を宿にした貧乏旅行だ。

既に紅葉も散り始め、寒々とした枝が骨格標本の様に連なる並木道を歩く。横を図体の大きなレジャー車やアメリカ製の大型バイクが排気ガスを撒き散らして通り過ぎる。

歩き疲れ、少し火照った体を休めるついでに、土産物屋を兼ねた休憩所に入る事にした。

駐車場の車の合間を抜け、そこにあの子はいた。

最初に目についたのは、その子の美しさだった。豪奢でも華麗でもないが、気になったのは、今、考えてみると外見の美貌とは違う引力だったのかもしれない。さらさらした黒髪と白い肌が明確な対照として印象に残る、その子は、しかし、なぜかこの晩秋に白いノースリーブを着て両腕を抱き、おとなしく駐車場の端に座り込んでいた。はつきりとした顔立ちは付近の別荘地に入りする裕福な家庭の娘を想像させる。私には手の届かない。だが、何か違う。

その子は季節外れの服装で独りで座り込んでいる。表情には元気がまるでなく、それも憂いのある令嬢と言うよりも酷く淋

しげなだけに見えた。魅力的な大きな瞳も心なし潤んで、道行く人々の姿を手の届かないものでも見上げる様に見つめている。

もしかして、そう思った私は、複雑な気分になった。声をかけるべきか、それともやめるべきか、躊躇した拳げ句、一度、その子の前を通り過ぎた。暫く歩いてから、どうしても気になつて振り向くと、その子はいなくなっていた。

いないとなると、無性に後悔する。会いたくなる。周りを見回し、地面に落ちた煙草の吸い殻を見る様に、とぼとぼと歩き去つていくあの子を見つけた。何も考えず、本能的に走り出して追いかけた。誤解かもしれない。そうであつてほしい。馬鹿にされて終わるだけだ。もしも、誤解でなければ、私が声をかけるのは良い事なのか自信はなかったが、だとすれば、だからこそ黙つて見過ごす事はできない。

「ねえ、待つて」

私が声をかけると、最初は自分だとは気付かなかつたのか、暫くしてから、その子は振り向いた。その瞳は遠くから見た時よりも遥かに胸を刺す光を投げかけてくる。

動悸が激しくなり、二の腕の血管が脈打つのを感じながら、たどたどしく罪悪感を覚えつつ私は聞いた。

捨てられた。

別荘地で遊ぶ者たちは、時に可愛らしい人間を連れてくる。

町で買ってきた愛玩用の人間だ。一般的にコーカソイドが多いが、種類はともかく、見た目が良くて小さめのものばかり。風景以外には土産物屋か中途半端な博物館くらいしかない別荘地では、えてして暇を持って余す彼らは人間を可愛がり、この快適な環境で野原を駆け回って十二分にストレスを解消する。そして、人間を捨てて町へと帰っていくのだ。住宅事情の悪い町では人間を飼うのは難しいし、そもそも多忙な日々世話をするのも面倒だからだろう。叔父が、そう言っていた。信じられなかった。

叔父から聞かされた聞くに耐えない話が、今、目の前にいた。その綺麗な姿からして、つい最近、捨てられたばかりなのは明らかだ。本人に話を聞くだけでも、何か後ろめたいのに、それがいつで、どんな連中だったのか、そんな事は訊けなかった。話しかけるべきではなかったらどうか。

所詮、私には何もできない。何もしてあげられない。いくら同情しても、気持ちは何の救いにもならないのだ。私もまた都会の真ん中に住み、まして、定職を持たず、自分の日々の食事でさえ満足に用意できないと言うのに、他の世話をするなどできそうにない。

何とかしてあげたい。でも、何もできない。

いや、多分、何かできるのだろう。我が身可愛さを捨てれば。だが、それができない意気地なしの自分もまた、この子を捨て

た連中と同類に卑しい言い訳を自分に唱え続ける。

その子は潤んだ瞳で私を見て、そして無言で去っていく。責める事も、頼る事もなく。

何の期待もなく。